

学 会 記 事

第 247 回新潟循環器談話会

日 時 平成 18 年 7 月 1 日 (土)
 午後 3 時～
 会 場 ホテルイタリア軒
 3 階 サンマルコ

I. 一般演題

1 CRP とメタボリック症候群

日本のメタボリックシンドローム診断基準を
 斬る

小田 栄司

県立吉田病院内科

CRP (炎症) は、心血管疾患の強い危険因子であり、インシュリン抵抗性と内皮機能障害に密接に関連して、メタボリック症候群 (MS) の中心的要素と見なされている。

欧米では、CRP 1 mg/L 以下が低リスク、1-3mg/L が中リスク、3 mg/L 以上が高リスクと見なされているが、日本では CRP を評価する基準がない。そこで、今回、健常な男性 179 人と女性 166 人を、腹囲基準を BMI 25 以上に置き換えた、変法 NCEP-ATP III 基準で、MS 群と非 MS 群に分類し、CRP のカットオフ値を、空腹時血糖 100mg/dL 以上で定義した MS100 と、空腹時血糖 110mg/dL 以上で定義した MS110 の両方で、男女別に、ROC 曲線を用いて検討した。その結果、CRP の最適カットオフ値は、すべての群で 0.65mg/L となった。(Oda E et al. Circulation Journal 2006 April; 70: 384 - 388)

日本のメタボリックシンドローム診断基準は、内臓脂肪症候群を作ろうと意図して、歪んだ腹部 (中心性) 肥満症候群の診断基準となったもので

あり、IDF 診断基準とも、AHA/NHLBI 診断基準とも矛盾して、混乱をまねいている。特に、日本肥満学会が決め、8 学会合同メタボリックシンドローム診断基準検討委員会が承認した、日本の女性の腹囲カットオフ値 90cm は、有害無益であることが、アジアの女性の腹囲カットオフ値 80cm を用いた、日本糖尿病合併症研究の再解析によって実証された。(Oda E, vs Sone H, Tanaka S, Ohashi Y, Yamada N. Diabetes Care 2006 May; 29: 1188 - 1189)

IDF 診断基準は、腹部肥満を必須条件とした診断基準であり、AHA/NHLBI 科学的声明は、これを批判して、腹部肥満を必須項目としない NCEP 診断基準を擁護した。また、ADA/EASD 共同声明は、現行の診断基準は、すべて不完全であり、症候群の名に値しない、と批判した。肥満も、腹部肥満も、それ自体は、心血管疾患の独立した有意な危険因子ではないので、メタボリック症候群の予備軍と考えた方が妥当と思われる。そこで、NCEP 診断基準項目の腹囲を CRP に置き換えた、新しいメタボリック症候群診断基準を提唱した。腹囲や、BMI などの身体計測値は、メタボリック症候群の診断項目から除外して、スクリーニングに利用すべきものと考えられる。(この提案は、AHA/NHLBI 科学的声明を執筆した Grundy の回答とともに、American Journal of Clinical Nutrition に掲載される予定)

2 心エコー図にて確定診断できた動脈管開存症の 1 症例

高石由貴子・高田 琢磨・岡田 義信

県立がんセンター新潟病院内科

症例は 62 歳女性。1998 年に副甲状腺癌のため当院で手術を行い、以後当科外来で内服治療をしていた。2000 年の検診で心胸比 59 %、胸部聴診上連続雜音を聴取した為、同年 10 月に当科を受診。経胸壁心エコーを施行したところ、肺動脈内に乱流を認め、動脈管開存症が疑われた。心不全症状が無かった為経過観察とした。2005 年 11 月当科受診時に軽度の肝障害と貧血を認めた。うつ

血肝を疑い2006年1月に心エコーを行い、経胸壁心エコーで動脈管開存症を再度指摘された。経食道心エコーで下行大動脈から肺動脈への明らかなジェットを認めた。2006年2月22日入院し心臓カテーテル検査を行った。大動脈造影での下行大動脈から肺動脈への血流ははっきりとは認められなかつたが、血液ガス検査で右室と肺動脈間で明らかなO₂ステップアップを認め、本症として矛盾しない所見が得られた。胸部造影CTでは下行大動脈と肺動脈間の血流を確認した。

動脈管開存症の頻度は1500～5000例に1例程度とされ、先天性心大血管疾患のうちで10%前後を占める。聴診上連続性心雜音で発見され、本症が疑われる。確定診断は一般的に心臓カテーテル検査によってなされてきた。近年、経胸壁心エコーで本症の診断が試みられるようになってきたが、成人例では解剖学的位置関係から動脈管を直接描出することは困難な場合が多い。一方で経食道心エコーでは大動脈弓部から胸部下行大動脈を連続的に観察することが可能で、本症例でも動脈管開存症の診断確定に際し非常に有用であった。

3 心筋炎により変化する心筋細胞の遺伝子発現の検討

塙 晴雄・渡辺 律雄・吉田 剛
吉田 香織・太田 好美*・眞田 明子
常 賀・伊藤 正洋・大倉 裕二
加藤 公則・小玉 誠・仲澤 幹雄*
相澤 義房・田辺 恭彦**
小田 弘隆***

新潟大学大学院医歯学総合研究科
循環器分野
同 保健学科*
県立新発田病院循環器内科**
新潟市民病院***

【背景および目的】劇症型心筋炎は、重症心不全に陥りしばしば死に至るが、急性期を乗り切れば心機能は急速に回復しうることが知られている。これは、心筋炎により生じる様々な要因が、心筋細胞の収縮弛緩を一時的には阻害するものの、心筋細胞は死には至らないことを示唆する。このよ

うな心筋細胞は、心筋炎によって様々な刺激を受け、多くの遺伝子発現を変化させていると推測されるが、その詳細は未だ十分解析されていない。今回我々は、ラット心筋炎モデルおよびヒト心筋炎においてその遺伝子発現の変化を検討した。

【方法および結果】劇症型心筋炎のモデルと考えられるラット自己免疫性心筋炎の心臓から心筋細胞のみを分離精製し、正常ラットのそれとgene chipにて解析し10倍以上（心筋炎の心筋細胞が最大シグナルを示した場合には正常よりも2.5倍以上）発現が変化している遺伝子を同定した。その中で、定量的RT-PCRにて心筋細胞が非心筋細胞よりも発現が多く、かつgene chipのデータと一致した遺伝子を同定したところ、5つの遺伝子が10-2000倍心筋炎の心筋細胞で増加していることが確認された。更に、ヒト心筋炎と心筋炎のなかった生検あるいは剖検心筋で検討したところ、いくつかの遺伝子で同様な結果が得られた。

【結果および考察】ラットおよびヒト心筋炎の心筋細胞は、正常心筋とは異なり、いくつかの遺伝子発現を大きく変化させていることが示された。この中には、心不全のマーカーや治療薬となったBNPやANPのような蛋白である可能性もあり、今後症例を追加し、さらに検討する必要があると思われた。

4 バルサルバ洞付き人工血管を用いた自己大動脈弁温存大動脈基部置換術

曾川 正和・名村 理・竹久保 賢
上原 彰史・林 純一

新潟大学大学院医歯学総合研究科
呼吸循環外科学分野

従来、大動脈弁輪拡張症に対する手術は人工弁を縫着した人工血管（composite graft）を用いた大動脈基部置換術が主であった。しかし、大動脈弁輪拡張症における大動脈弁自体は、病変がない場合が多く、大動脈弁不全症の原因は、sinotubular junctionの拡大であることがわかつてきた。

したがって、大動脈弁を温存することが可能で